

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 松浦伶氏の思い出

山岡洋一

一 翻訳出版が光輝いていた時代の英雄

文藝春秋の翻訳出版部長として、翻訳出版のひとつの時代を代表する編集者だった松浦伶氏が亡くなった。いま、翻訳出版は輝きを失っている。それとともに、松浦さんのような英雄もあまり見かけなくなった。時代が変わって翻訳出版業界が一時の輝きを失ったから英雄が少なくなったのだろうが、松浦さんのような英雄がいなくなったから、翻訳出版業界は元気を失ったという部分もあるのかもしれない。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳出版が光輝いていた時代の英雄

文藝春秋の翻訳出版部長として、翻訳出版のひとつの時代を代表する編集者だった松浦伶氏が亡くなった。享年 71 歳だから、まだまだ活躍できる年齢であった。

じつは先月号で駆け出しのころの話を書いたが、このとき、翻訳者が著作権者としてもつ強い権利について親切に助言して下さった方のうちひとりが、松浦さんであった。先月号の記事を書いていたとき、まさか松浦さんが洗礼を受けて天国に旅立とうとしているとは思いませんでした。

個人的には、独立した直後の一時期に、何点かの翻訳書でお世話になったにすぎない。松浦さんの仕事はフィクションの翻訳出版が中心だったので、ノンフィクションのうちごく一部の分野しか扱わない翻訳者はいわば傍流でしかなかったはずだ。だから、松浦さんの仕事のうち、ごくごく一部に触れたにすぎない。だが、短い期間に何点かの翻訳を行ったときの印象は強烈だった。仕事の中心を産業翻訳から出版翻訳に移そうとしていた時期だったこともあって、その後、仕事の仕方がかなり変わったといえるほどの影響を受けている。

松浦さんが活躍していた時代はまさに、翻訳出版の黄金時代だったといえる。当時はミステリーを中心に、海外の小説がよく売れた。たとえば松浦さんが手掛けたものではスティーヴン・キング、トム・克蘭シー、スコット・トゥローといった作家の作品、他社から出版されたものではジェフエリー・アーチャー、マイクル・クライトン、ジョン・グリシャムらの作品がいまとは 1 桁も 2 桁も違う部数売れていた。だから、翻訳出版は元気だった。海外の著名作家の作品を派手に買い、大量に刷って派手に売る。その中心に位置していた英雄のひとりが松浦さんだった。

あれから 10 年もたっていないのだが、翻訳出版業界は様変わりした。松浦さんが築いた文藝春秋の翻訳出版部がいつの間にかなくなっていたことに象徴されるように、翻訳出版は輝きを失っている。それとともに、松浦さんのような英雄もあまり見かけなくなった。時代が変わって読者の嗜好が変わり、

翻訳出版業界が一時の輝きを失ったから英雄が少なくなったのだろうが、松浦さんのような英雄がいなくなったから、翻訳出版業界は元気を失ったという部分もあるのかもしれない。

松浦さんの印象では、精力的だったことと、はちやめちやにみえて実は筋を通す人だったことがとくに大きいように思える。

文藝春秋ではじめての仕事をしたとき、明日の 9 時に来てほしいという連絡を受け、午前 9 時ですわねと確認したところ、とんでもない、午後 9 時だといわれて仰天した。その後も毎回そうだったが、校了の前になると、たいていは 3 日ほど、午後の 7 時から 9 時ごろに編集部に行き、朝の 4 時から 5 時まで、問題点をひとつずつ検討し、修正していく作業を行う。いつも、松浦さん、校正者の赤尾三男さんと 3 人で徹夜することになる。何社もの出版社、何人も編集者のもとで仕事をしたが、これほど徹底してゲラをチェックする編集者にはあまり出会っていない。

なぜ徹夜で仕事をするのかというと、昼間は会議や来客やで落ちつかないからという。だから、徹夜でゲラを検討して朝方にタクシーで帰宅しても、午前中には出社していることが少なくなかったようだ。ともかく精力的だったというのは、ひとつにはこの仕事ぶりがなんとも強烈だったからである。昼間は翻訳出版部長という管理職の仕事に忙殺されているので、夜になって編集者としての仕事をするというのだから。

精力的なのはたぶん、翻訳出版、とくにエンターテインメント小説の翻訳出版が好きで好きでたまらなかつたからなのだろう。あるとき、こんな話を聞いた。少し前までは、好きな分野の海外小説の翻訳はすべて読んでいたのに、最近は出版点数が多くなってとても読めなくなってしまったというのだ。松浦さんの世代であれば、自分の専門分野の本をすべて読むというのは、ある意味で常識だったのだろうが、それにしても、よほど好きでなければ読めるはずがない。仕事が趣味だったのか、趣味が仕事になっていたのかは分からないが、心底好きだったのは

たぶんたしかだろう。

だから、仕事の面でも、大好きな本をひとりでも多くの読者に届けたいという情熱が原動力になっていたようだ。売れ筋の本を選んで翻訳権を買うわけではない。売れそうな本ではなく、売りたい本の翻訳権を買う。そういう姿勢だったのではないかと思う。

筋を通すという点についていうなら、著作権の原則を徹底して守る編集者だったと思う。何しろ、翻訳者には訳文に対する著作権があり、とくに著作者人格権という強力な権利があることを懇切丁寧に教えてくださった編集者なのだから。

たとえば、3日連続の徹夜で訳文をチェックするとき、あきらかな間違いを除くと、翻訳者の書いた訳文に赤を入れる（つまり訂正するよう指示する）ことはまずなかった。ここがおかしいから考えてほしいといわれる。なぜおかしいのか、どう修正すればいいかは、こちらから質問しないかぎり、話してくれない。意地が悪いと思えるかもしれないが、そうではない。編集者として、訳文に対しては著作権者である翻訳者が最終責任を負うという原則を崩さなかったのだ。

そういうわけで、徹夜のチェックの際に、訳文について徹底して議論することになるが、そのときに印象的だったのは、「普通はそう訳している」とか、「通常はこう表記する」という答えを受け付けないことだった。正しい日本語なのか、正しい表記なのかをいつも考える。正しく美しい日本語はこうあるべきだという原則を確立しようとしていて、間違っていると考える表現は、世の中のほとんどの人が使っていても拒否する。そういう意味でも、筋を通す編集者だった。

そういう編集者だから、訳しにくい箇所をごまかしたり、手を抜いたりするのをとくに嫌った。たとえば、原文にこの副詞がなければ楽に訳せるのにも思ふ場合がある。そういうときに、副詞を訳さない方法をとると、すぐに指摘される。また、原文の意味がよく考えないまま、常識的な訳し方で、つまり英文和訳式に訳していると、すぐに指摘される。原文の意味を考えて、美しく正しい日本語で表現するよう求められる。だから、翻訳者にとって怖い編集者だった。怒ったり、怒鳴ったりすることはなく、口調はいつも穏やかだが、かならず痛いところをつ

いてくるという意味で、恐ろしい編集者だったのだ。そのうえ、校正者の赤尾さんが同じ意味で恐ろしい人なので、文藝春秋の仕事をするときはほんとうに必死だった。

最近では、「こなれた訳文」を要求する編集者が増えているが、訳しにくい部分、つまり日本語で表現しにくい部分は割愛して読みやすくしようという場合が少なくないようだ。松浦さんはこの方法をとくに嫌っていた。そういう方法をとると歯止めが利かなくなるといわれていた。たしかにいまでは、歯止めが利かなくなった翻訳が、「こなれた訳文」だとされて、もてはやされている。しかも、編集者が翻訳者の意向とは無関係に訳文に手を入れた結果だという場合もあるのだから、何をかいわんやである。出版の事業は著作権を基盤としている。その肝心の著作権について、教育を受けていない編集者が多すぎる。原著者の著作者人格権も翻訳者の同一性保持権も無視するのであれば、出版の事業はなりたたなくなる。松浦さんのように筋を通す編集者はいまや、絶滅危惧種になっているようにすら思える。

いま、ほんとうの意味で名訳だと思える本をみていくと、松浦さんが編集した本がいくつも入っているのにおどろく。たとえば、上田公子訳のスコット・トゥロー『推定無罪』や、芝山幹郎訳のステューブン・キング『ニードフル・シングズ』などがそうだ。名訳を生み出すのはもちろん翻訳者だが、たぶん、松浦さんの熱意、訳文を厳しくチェックする姿勢、著作権者としての翻訳者を大切に作る姿勢が背景になって、名訳が生まれるのだろう。

松浦さんの思い出ではもうひとつ、徹夜でゲラをチェックしているときに、若手や中堅の翻訳者が何人も遊びにくることがあったのをよく覚えている。とくに用事もないようなのに、夜遅くに翻訳者が集まってくることがある。コーヒーが用意されていて、缶ビールをもって来る人もいて、しばし談笑して帰っていく。もちろん、仕事がほしいからご機嫌伺いにくる翻訳者もいたのだろうが、それだけではないようだ。たいていは、松浦さんに育てられたか、鍛えられた翻訳者だったのだから。

松浦さんは実績のある翻訳者を使うだけではなかった。まったく実績のない翻訳者に仕事を与えて育てることが多かったのだ。文藝春秋で何点か翻訳書ができれば、他社の編集者が安心して使ってくれるようになっていた。かくいうわたしも駆け出しのころ

にお世話になっている。

このように、何人もの翻訳者を育て、鍛えてきた。それに当時は翻訳書がよく売れていたこともあり、松浦さんは印税率を引き下げようなどと考える人ではなかったの、翻訳者にとって生活を安定させるという点でも、ありがたい編集者だった。だから、翻訳者の間ではたぶん、松浦さんをしたう人が多いのではないだろうか。だが、情熱があり、精力的で、筋を通す人が、組織のなかでうまく立ち回れるのだろうか。松浦さんは新卒で文藝春秋に入社して定年まで勤め、その後も何年か、監査役という不思議な立場で残ったのだが、社内での立場はそれほどよくないのではないかと思えたこともある。実際にどうだったのかは分からないが、少なくとも、松浦さんの引退後に、文藝春秋の翻訳出版部が急速に元気をなくしたようで、いまでは姿を消しているのは残念でならない。

松浦さんにとって最後のヒット作になったのが、

村松潔訳の『マディソン郡の橋』だ。なにしろ、単行本だけで 200 万部を軽く超えたのだから、文句なしの大ヒットだ。ロバート・ジェームズ・ウォラーというまったく無名の小説家の処女作だし、当時は決して売れ筋ではなかった分野の作品だったのだから、アメリカでヒットする前にこの作品の翻訳権を買ったのは、一種のバクチだったとも思える。このバクチには勝ったのだが、いまの時点で振り返ると、この大ヒットが翻訳出版の栄光の時代の終わりでもあり、低迷の時代の始まりでもあったように思える。その後の『ハリー・ポッター』や『ダヴィンチ・コード』にみられるように、翻訳出版は一人勝ちが目立つようになった。数百万部の大ヒットがあつて、ほかはさっぱり売れない。そういう時代の幕開けになったのが『マディソン郡の橋』だったようにも思えるのである。翻訳出版のひとつの時代を代表する英雄のひとりだった松浦さんの引退とともに、黄金の時代は終わったのだろうか。松浦伶氏の跡を継ぐ編集者は、はたしているのだろうか。



100 億ページのネット表現辞典の引き方

- Google 検索を利用することにより、インターネットそのものをまるごと表現辞典として活用する。
- ネイティブスピーカーの言語感覚を疑似体験することにより、自然な表現かどうかを追認する。
- 学術論文、特許文献、書籍などに分野を限定することにより、チェッカーの判断を推定する。

安藤進著『ちょっと検索！ 翻訳に役立つ Google 表現検索テクニック』

丸善、2007 年 8 月 10 発行

1,680 円 (税込)

A5 判 224 頁

ISBN : 9784621078693